

Q：役場（行政）からの通達により、暑さ指数（WBGT）を基準に、ある数値以上になると、園庭や外でのあそびを禁止するよう指導されています。しかし、現場としては、日常的に外あそびを年中しているため、夏であっても、子どもたちは比較的暑さに慣れており、必ずしも一律禁止が妥当とは思えないと感じています。どうしたらよいのでしょうか？（保育者、大阪府内園長）

A：このテーマは非常に繊細で、科学的根拠・行政の安全配慮・園児の発達面の3つをバランスよく調整させる必要があります。

1. 行政指導の背景

WBGT（暑さ指数）は、熱中症リスクを年齢や体力にかかわらず、同一基準で評価する指標です。集団事故を防ぐために、「安全マージン」を大きめに設定していると思います。万一の事故時の責任回避・法的根拠の確保も目的とされていると思います。

2. 現場の課題

毎日、外あそびをしている園児は、発汗能力・循環機能・行動調整力が鍛えられています。室内中心の生活の子どもや大人と比較し、同じ WBGT 値でも耐性が異なります。一律禁止により、体力低下・暑熱順化の遅れが起こる可能性があります。

3. 科学的視点からの対応案

連日少しずつ暑い環境に慣れることで、汗のかき方や体温調節能力が向上します（暑熱順化、Heat Acclimatization）。また、WBGT が高くても、短時間・日陰・水分補給・ミスト活用などで外あそび時間を調整する（リスク管理の分化）こともできると考えます。

よって、「禁止」ではなく、「条件付き許可」への切り替えの相談をお勧めします。園児の健康記録（体温・発汗状況・活動後の様子）を継続的に記録して、現場独自の安全基準を補助データとして示すと良いでしょう。

4. 行政との調整方法（提案）

対立ではなく、説明型でアプローチすると良いでしょう。「園児が暑さに慣れている事実」「段階的な運動制限」「安全確保策の明文化」を提示し、相談されるのはどうでしょうか。また、WBGT と併せて、園独自のモニタリング指標（活動後の顔色・発汗・脈拍など）を活用するのも良いでしょう。そして、短時間の外活動のメリット（健康・発達面）を、科学論文や研究者の資料を添えて説明してみましょう。最終的には、一律禁止基準+園の裁量基準の併用を提案されてみるのはどうでしょうか。

（前橋 明）